

碑文

永昌元年己丑四月飛鳥淨御原大宮那須国造
追大壹那須直韋提評督被賜歲次庚子年正月
二壬子曰辰節殄故意斯麻呂等立碑銘悝云尔
仰惟殞公広氏尊胤国家棟梁一世之中重被忒
照一命之期連見再甦碎骨挑髓豈報前恩是以
曾子之家无有嬌子仲尼之門无有罵者行孝之
子不改其語銘夏堯心澄神照乾六月童子意香
助坤作徒之大合言喻字故無翼長飛无根更固

書き下し文（東野治之説による）

永昌元年己丑四月、飛鳥淨御原の大宮の那須国造、追大壹那須直韋提、評督を賜る。歳は庚子に次る年、正月二壬子の日、辰節に殄す。故に意斯麻呂等、碑銘を立て悝ぶと尔云う。

仰ぎ惟いみるに、殞公は広氏の尊胤にして、国家の棟梁なり。一世の中、重ねて忒照せられ、一命の期、重ねて再甦せらる。骨を碎き髓を挑ぐとも、豈前恩に報いむや。是を以て曾子の家に嬌子有ること無く、仲尼の門に罵る者有ること無し。孝を行うの子、其の語を改めず。夏の堯の心を銘じて、神を澄まし乾を照らさむ。六月の童子、意香しくして坤を助けむ。徒を作すこと之れ大にして、言を合わせ字に喩らかにす。故、翼無くして長く飛び、根無くして更に固からむ。

大意

永昌元年（689）4月、持統天皇の治世で那須国造を務めた追大寺那須直韋提が、評の長官に任ぜられた。文武天皇4年（700）1月2日に亡くなった。そこで、意斯麻呂等が石碑に銘文を刻んで、那須直韋提を偲んで言う。

思い返してみると、亡き公は広氏の末裔であり、国家を支えた人物であった。一生の内に国造と評督に任ぜられるという二度の榮譽にあずかり、生涯を終えてもその業績は子孫に引き継がれた。粉骨碎身して、どうして那須直韋提の恩に報いないだろうか。孝行の家門には驕る者はなく、孔子の門弟に罵る者はない。孝を重んじる韋提の子である我々は、その格言に背くことはない。孝で知られる堯の心を銘じて、心を澄まして父を顕彰しよう。孝の心ある子は、母を助けるものである。立碑のために多くの人々が集った。言葉を紡いでここに碑文を記す。我々一族の功績は、翼はなくとも広く知れ渡り、根はなくとも強固なものになるだろう。

●語句の解説

語句	意味・解説
永昌元年	則天武后称制期の年号で、持統天皇3年（689）にあたる。 「永昌」は、中国や朝鮮半島で使用された年号。
飛鳥浄御原大宮那須国造	飛鳥浄御原大宮の時代（天武・持統）に那須国造に任じられた、という意味。
庚子	庚子の意。 古代の他の墓誌にも「庚」と「庚」を通用する例がある。
辰節	「辰のとき」と訓むと午前8時頃を指すが、「辰」にも「節」にも「とき」の意があり、他にも似たような表現が見られることから、「辰節」で「とき」と訓んだと考えられる。
式照	式回にわたり栄誉を受けた、ということ。 一度は那須国造に任じられたこと、もう一度は評督に任じられたことを指す。
一命之期、連見再甦	「一命之期」は没後のことを述べているという解釈もある。 「連見再甦」は、命が終わった後に引き続いてまた甦った、という意味。これは生前の韋提の地位が子息によって継承されたことを述べていると考えられる。
曾子之家、无有嬌子	曾子は孝行で知られた人。 「嬌」は「驕」と考えられるので、孝行で知られた曾子の家には驕った者はいない、という意味と考えられる。
仲尼之門、无有罵者	仲尼は孔子の別称。 孔子の門弟には口汚く罵る者はいないという意味と考えられる。
堯	中国の聖帝。 孝に篤い人物として知られている。
六月童子	実母に対する孝で知られる伯奇のことか。 伯奇の父は、『毛詩』の「六月」の詩に將軍としての功を讃えられている。
作徒之大	石碑の建立のために多くの人が集った様子を表現している。

笠石神社

笠石神社は、那須国造碑を御神体としている神社です。国造碑が文字の刻まれた石の上に笠のように石を載せていることから「笠石」と言われていることが由来のようです。

那須国造碑は、延宝4年(1676)に岩城の僧円順によって発見されました。それを円順が大金重貞に話したことが機縁となり、重貞によって確認され、徳川光圀の命により、元禄4年(1691)に碑堂を建てて保存するようになり、翌元禄5年には修験泉蔵院を置いて守らせました。これが、現在の笠石神社の始まりであると言われています。

国造碑の原位置については、元々那珂川町の小川にあったという伝承もありますが、少なくとも円順の発見以降は、場所の移動はなかったと推測されます。

光圀は、那須国造の墳墓を求めて上・下侍塚古墳を発掘させていますが、現在碑堂が建っている場所にも塚らしき盛土があります。

大金重貞著『笠石御建立起』には、国造碑の所在について「長八間横七間之塚上二高四尺三寸石碑あり」と記しており、14m×12m程度の盛土の上にあったとされています。現在碑堂が建つ盛土は、南北約13.5m、東西約13.6mで、ほぼこれに合致します。

木曾武元著『那須拾遺記』によれば、この盛土は高さ7尺の内3尺まで発掘されていますが、墓誌等は発見されなかったと言われています。しかし、今なお終末期古墳の可能性は残されており、那須国造碑が那須直章提の墳墓の上に建てられていた可能性は、まだ否定できません。

【参考文献】

- 斎藤忠・大和久震平『那須国造碑・侍塚古墳の研究』吉川弘文館 1986年
- 田熊信之・田熊清彦『那須国造碑』中国・日本史学文学研究会 1987年
- 東野治之「那須国造碑」『日本古代金石文の研究』岩波書店 2004年
- 眞保昌弘『侍塚古墳と那須国造碑』同成社 2008年
- 大田原市教育委員会『大田原の遺跡』 2012年
- 大田原市教育委員会『大田原市の文化財』 2015年